

## 第一五回丸山眞男文庫記念講演会

# 丸山眞男の思想世界

### ——デモクラシー論との関連において——

加藤 節

第一五回丸山眞男文庫記念講演会は、成蹊大学名誉教授・加藤節先生をお招きして、二〇一三年二月六日に東京女子大学で開催された。この講演については、丸山文庫顧問・平石直昭氏に作成していただいた概要が、東京女子大学『学報』二〇一三年度第四号（二〇一四年三月発行）に掲載されている。本『報告』では、加藤先生ご自身の校正を経て、ご講演全体の記録を掲載させていただいた。

加藤節先生に深く感謝申し上げます。

東京女子大学丸山眞男記念比較思想研究センター長 大久保喬樹

### はじめに

ただ今ご紹介をいただきました加藤です。本論に入るのに先立ちまして、予めお断りしておきたいことがあります。それは、これから私の報告が一つの試論の域を出ないということです。丸山の死後、丸山研究は、大変な活況を呈して参りました。しかし、私自身の怠慢から、私は、そうした研究には実はあまり目を通しておりません。その点で、私の報告は、数多くの研究を踏まえた厳密な丸山研究というよりも、私は丸山の思想世界を試みにこう読んだという意味での試論に近いものであることを申し上げておきたいと思えます。レジュメにそって本論に入りますが、多岐にわたる論点を限られた時間のなかでお話しますので、少々早口になることもあろうかと思えます。早すぎ

るようでしたら、どうか遠慮なく御指摘下さいますようお願いいたします。

## 一・丸山 of 思想世界

### (一)「本店」と「夜店」

丸山という人は、類まれな言語感覚に恵まれていたこともありまして、ものごとやものの考え方の二項的なコントラストを浮かび上げさせる用語法に卓越した思想家でした。「であること」と「すること」、「タコツボ型」と「ささら型」、「実感信仰」と「理論信仰」といった周知の表現はその顕著な例でした。

しかも、日常用語を使って対象の分類を試みる丸山のそうした用語法は、彼が自分の仕事について語る場合にも及んでおりました。「本店」対「夜店」というよく知られた比喻はその典型でした。その場合、丸山が「本店」という言葉で意味したのは、著書で言えば、『日本政治思想史研究』や『丸山眞男講義録』に代表される政治思想史家としての「専門的な」研究領域であり、「夜店」とは、著書『現代政治の思想と行動』に収録された政治学に関する「啓蒙的」な仕事や「ジャーナリズムむきの」実践的な言説を意味しておりました。たしかに、こうした二分法的な比喻は大変わかりやすい面をもっています。しかし、他方で、そうした二項対比的な比喻は、それが鮮やかであればあるほ

ど、ときに對比される二つの項の関係を曖昧にする危険性を秘めていることも否定できないように思われます。

事実、丸山が「本店」と「夜店」とにたとえた仕事の二つの領域がどのような関係に立っているかは必ずしも自明ではありません。例えば、「本店」と「夜店」という比喻に価値的な序列を認めて、丸山が「本店」での仕事を自分にとって本質的なものと考え、「夜店」での仕事を状況的なものと捉えていたと考えることも不可能ではありません。しかし、丸山のように複眼的な思考様式をもつ思想家については、比喩的に語られた「本店」と「夜店」との仕事の切り離したり、両者の間に優先順位をつけたりすることは不自然であり、両者は一体となつて丸山の思想世界を形成していたと考えるべきではないかと思えます。三つの事実が、そうした判断の妥当性を証明しております。

一つは、丸山本人が「学術論文」と「啓蒙的論文」との使い分けというような器用さはもともと持ち合せてはいない」と述べて、自分のなかでの「本店」と「夜店」との関連を強く示唆していることです。その関連をうかがわせる第二の事実も、丸山が「本店」の仕事に重点を置くようになった後も、その仕事のなかに「夜店」で強調した視点を繰り込んでいることです。それは、例えば、丸山が「本店」の系譜の最後に位置する『矢野龍溪 資料集』第一巻の序文において、「夜店」のなかで繰り返してきた「(反政治主義と全政治主義との) 悪循環の打破がわれわれの思考の政治的成熟のために欠かすことができない大前提である」という主張を反復している点に典型的な形で示されてい

ます。丸山における「本店」と「夜店」との関連を示す第三の事実として、丸山の場合、「本店」の仕事にも、「夜店」の場合と同じように、自分が生きている同時代に対する強烈な問題関心が脈打っていることを挙げたいと思います。それは、例えば丸山が、恩師南原繁の作品『フィヒテの政治哲学』について、「現代に対する切実な問題意識が純粹な歴史研究と奥深いところで契合している」点の「見事さ」を指摘したうえで、それを、自らも担っている思想史学に「本質的に負わされている課題」として承認している点から推測できるかと思えます。

以上のように、丸山において「本店」と「夜店」とは内的に関連していたと考えることができます。そうした前提に立つて、「本店」と「夜店」との垣根を取り払ったうえで、これから、丸山の世界の全体的な構造についての一つの見取り図を描いてみたいと思います。その場合、分析の焦点を丸山のデモクラシー論に置くことにしたいと思います。論点を先取りして申しますと、デモクラシー論と関連づけることによって、丸山の仕事を一元的に理解するための一つの有力な視座が得られると考えられるからです。

## (二) 思想世界の三つの領域

丸山という人は、自分が何をしているかについて極めて自覚的な思想家でした。丸山が自分の仕事の意図や目的について自ら言及することが多い事実がそれを示しています。丸山のそうした言及に従って膨大な量に上る彼の仕事を、単純化しすぎだとの批判を覚悟の上で敢え

て整理いたしますと、丸山の世界は次の三つの領域から構成されていたと言えるかと思えます。

第一は、丸山の学問の出発点となった最初の著作『日本政治思想史研究』に代表される領域であり、「日本の「良き」思想的伝統を過去の歴史の中からとり出してくる作業」、具体的には、「明治維新の近代の側面、ひいては徳川社会における近代的要素の成熟に着目する」仕事でした。戦中に開始されたこの研究領域は、一九四六年に発表された論文「近代的思惟」が示すように、戦後の丸山の仕事にも引き継がれ、一連の福沢論吉論や論文「明治国家の思想」に具体化して行きま

した。

丸山の世界の第二の領域は、戦後になってから開始され、「日本の精神構造なり日本人の行動様式の欠陥や病理の診断として一般に受け取られてきた」一連の仕事に求められます。言うまでもなく、『現代政治の思想と行動』に収められた「超国家主義の論理と心理」、「軍国支配者の精神形態」、「日本ファシズムの思想と運動」といった論文がその代表例をなしております。

丸山の仕事の第三の領域は、外来思想との文化接触の型を規定する日本人の思惟構造の原型を探ろうとする研究でした。それは、丸山自身の言葉を使いますと、「外来」思想を「日本化」させ、修正させる契機として繰り返し作用する思考のパターンを世界像の「原型」(Prototype) という名の下に取扱う」研究ということになります。この第三の研究領域は一九六〇年代に入ってから本格的に開始され、

六三年から六七年にわたる日本政治思想史の通史をめざした講義で深められた後、「外来思想を日本化する契機」を「つきつきになりゆくいきほひ」という「思考のパターン」に見いだした七二年の「歴史意識の古層」や、八四年の「原型・古層・執拗低音」、八五年の「政事まつりごとの構造——政治意識の執拗低音」といった論文に結実して行くことになりました。

私の考えでは、一見したところ別々のものに見えるこれら三つの研究領域は、丸山の中ではバラバラのものではなく、全体として一つの円環構造をなしております。以下、丸山のデモクラシー論との関連に注意を払いながら、その円環構造の解明を試みてみたいと思います。

### (三) 戦中と戦後との間

「日本における近代的思惟の成熟過程」をあきらかにしようとする丸山の仕事の第一の領域は戦中から戦後へと持続しておりますが、丸山のなかで、その仕事の意味は戦中と戦後とで異なっております。戦中の丸山にとって、徳川時代における「近代的思惟の成熟過程」を分析する仕事は、それ自身が「国体」神話に彩られた天皇制ファシズム下で声高に叫ばれた「近代の超克」論への批判の意味をもち、また、徳川期の「思想的近代化」を「支配的社會意識の自己分解」として描いたその仕事の内容には、盤石な天皇制レジームも「崩壊への内在的な必然性をもつこと」への丸山の期待が込められておりました。

それに対して、第一の領域のうち、「明治維新の近代的側面」を思

想史的に分析し、例えば、陸羯南に代表される明治ナショナリズムの「健全さ」を確認した戦後の仕事には、敗戦という「打ちひしがれた惨憺たる境涯」のなかで、「国民みずからの思想する力についての自信」を回復させ、「近代の超克」論に見られた「近代思想即西欧思想という安易な等式化」へ「逆戻りする危険」を回避しようとする丸山のナショナルな問題意識が潜んでおりました。それは、GHQによる占領下にあえて「新日本文化の創造」を説いた南原の精神に通じるものでした。

しかし、戦後の丸山の知的関心は、こうした第一の領域ではなく、圧倒的に、第二の領域、すなわち、一九三〇年代から四〇年代にかけてあきらかになった「日本の精神構造」や「日本人の行動様式」の「欠陥や病理」を批判的に分析することに注がれました。もとより、そこには、「戦争体験をくぐりぬけた一人の日本人としての自己批判」の意味が、また、戦争を阻止できなかったことへの「悔恨」の念が込められておりました。この第二の領域において、丸山が、「日本の精神構造」の「病理現象」を、社会的上位者による抑圧を社会的下位者に次々に移譲して行く「抑圧移譲の構造」や、「天皇制統治構造」における「無限責任」と「無責任の体系」との悪循環に見いだしたことはよく知られている通りです。

ここにおいて重要なことは、「日本の精神構造」の「病理」の解明に取り組んだこの第二の研究領域が、丸山のなかでは、日本の「思想的近代化」を問題とした第一の研究領域と二点において連動し、連鎖

していたことです。第一点は、丸山にとって、日本の病的な精神が「一時的な逸脱」ではなしに構造化されており、その意味で、日本における近代的精神の成熟のために不断に克服されなければならないものであったことでした。そして、もう一点は、丸山が、病的な精神構造の対極をなすその近代的精神の担い手を、「自由で自立的な個人」に見いだしたことでした。丸山が第二の研究領域で価値化した「自由で自立的な個人」とは、彼が第一の研究領域において、デカルト、ホッブズ、ロック、カント等の哲学から抽出し、造型した「近代的人格」の理念型と重なるものであったからです。

その場合、第一の領域と第二の領域とのこうした連鎖に関連して見逃すことができないのは、「自由で自立的な個人」の価値化が丸山自身による「天皇制の「呪力からの解放」という血みどろの内的苦闘の歴史を伴っていたことです。

丸山によりますと、戦前、戦中の丸山は、父幹治の影響もあって、「重臣リベラリズム」や「立憲主義的天皇制」を肯定する立場に立っておりました。しかし、丸山は、「敗戦後、半年も思い悩」み、そのなかから論文「超国家主義の論理と心理」を書くことによって、「天皇制が日本人の自由な人格形成——自らの良心に従って判断し行動し、その結果にたいして自ら責任を負う……人間の形成——にとって致命的な障害をなしている」という結論に「ようやく」到達したのでした。その意味で、天皇制との訣別は、丸山が、「私は政治的≡集団的価値の独自性をいわば自明の出発点として発足しながら、自由な人格への

途を歩一歩とさかのぼってきた」と述べる自身の思想遍歴の終点に位置していたと言つてよいと思います。それはまた、丸山による敗戦の思想化の帰結でもありました。

このように、丸山における第二の領域の仕事が、敗戦の思想化を通して、自由で自立的で自己責任を負いうる個人の価値化を不動の前提とするものになったとき、そこから、戦後の丸山におけるデモクラシーへの強いコミットメントが導かれることになりました。

## 二 デモクラシー論の展開

### (一) デモクラシーへのコミットメント

丸山は、彼が「近代的人格」とも呼んで価値化した「自由で自立的な個人」に次の三つの属性を与えました。すなわち、「前国家的権利」、つまり国家に先立つ自然権としての基本的人権の主体であること、その基本的人権に属するものとして学問、道徳、芸術、経済といった広範な文化を営むための自由を有する存在であること、自己完結的で「自足的」な原子的存在ではなく、「相関的で社会的な」存在、「社会」が「精神のなかに実在している」社会的存在であることの三つに他なりません。そして、丸山が「自由で自立的な個人」に与えたこれら三つの属性から丸山のデモクラシー論の個性的な特徴が生みだされることになりました。

まず、丸山が言うように、個人が国家に先立つ自然権の主体である  
とすれば、国家は、そうした個人が集まって自ら作りだすもの、した  
がって、個々人の集合体としての人民が主権をもつデモクラシーを構  
成原理とするものになる他はありません。その点で、個人を「前国家  
的存在」とみなした丸山が、「超国家主義の全体系の基盤たる国体が  
その絶対性を喪失し今や始めて自由なる主体となった日本国民にその  
運命を委ねた日」であった一九四五年八月一日を「原点」とする「戦  
後民主主義」の動きに全面的にコミットし、戦後体制の構成原理をデ  
モクラシーに求めたのは、あきらかに論理的な必然であったと言わな  
ければなりません。それはまた、天皇主権から人民主権への主権の変  
革を意味する「民主革命」への丸山のコミットメントを意味するもの  
でもありました。

しかし、丸山は、民主主義を手放して礼賛するデモクラットでも、「民  
主革命」の実現を歴史的必然として楽観する民主主義者でもありませ  
んでした。丸山は、「民主革命」を成し遂げるために不可欠な歴史的  
課題を見すえながら、デモクラシーの「虚妄」化を不断に克服するた  
めの条件を追い求めた思想家であったからです。

## (二) 「民主革命」のための歴史的課題

丸山が、「民主革命」の遂行のために戦後の日本がかかえる歴史的  
課題を何に見いだしていたかを示す文章が残されています。それは、  
東大法学部において行われた一九四八年度の「東洋政治思想史」講義

の「開講の辞」に見られる次の一文に他なりません。

「現代日本の歴史的境位は、一方において社会のあらゆる面  
で根強く残存する封建性の克服が必須の課題として要請されてい  
ると同時に、他方において、もはや単なる近代化、純粋な近代化  
ではなくして、ほかならぬ近代の止揚、市民社会の止揚が日程に  
登っている。……この二重の課題——近代化と同時に、近代化する  
という——こそ、我国の民主革命にこの上なく重大かつ困難な負  
担となっている……」。

このように、丸山は、「我国の民主革命」を貫徹するための歴史的  
課題を、「封建性の克服」という意味での「近代化」と、「市民社会の  
止揚」という意味での「現代化」との二つに探り当てておりました。  
その場合、丸山が、戦後の日本においてデモクラシーが根づくための  
条件をまず「近代化」に求めた理由を理解することは困難ではありま  
せん。戦中からの思索の延長線上に「自由で自立的な個人」という「近  
代的人格」の類型にふさわしい政治形態をデモクラシーに見いだして  
いた戦後の丸山が、「民主革命」の徹底のために、「近代的人格」の形  
成を阻む「封建制」の「克服」という意味での「近代化」を要求する  
ことは自然であったからです。その点に関する限り、丸山においてデ  
モクラットであることと「近代主義者」であることは同じ意味をもっ  
ておりました。

では、「近代主義者」丸山が、「民主革命」の遂行のために戦後の日  
本が解決すべきもう一つの歴史的課題を「近代の止揚、市民社会の止

揚」という意味での「現代化」に求めた理由はどこにあったのでしょうか。私の見る限り、丸山において、この問題は、近代「市民社会」がもたらすデモクラシーの「虚妄」化をいかに克服するかという問題意識と重なっていたと考えていいかと思えます。

### (三) 「市民社会」とデモクラシーの「虚妄」化

戦後日本における「民主革命」の遂行のための第二の課題を「市民社会の止揚」に求めた丸山の視点について考える場合、まず次の二点を確認しておく必要があると思えます。

第一点は、丸山が「市民社会の止揚」という場合の「市民社会」が、ヘーゲルやマルクスの用語法における近代の「ブルジョア社会 *bürgerliche Gesellschaft*」を意味していたことです。それは、丸山が、「近代の止揚、市民社会の止揚」という言葉を含む先の引用文に続いて「現代日本が単なる近代化、単なるブルジョア革命の完成過程にあるならば……」と述べている事実から明らかです。確認すべきもう一点は、丸山が真正のデモクラットであるがゆえに、逆に、歴史のなかにおける現実のデモクラシーが「虚妄」に陥ることに極度の警戒を払った思想家であったことです。その点で、「民主革命」と「市民社会の止揚」とを連動させる丸山の視点は、近代「ブルジョア社会」におけるデモクラシーの「虚妄」化をいかに克服するかという問題意識につながっていたと言つてよいと思われまふ。

その点に関連して、「戦後民主主義」の「虚妄」を言い立てる言動

に対して、丸山が、「戦前の日本帝国は「虚妄」ではなくて、「實在」だともいうのか、それなら私は日本帝国の實在よりもむしろ日本民主主義の虚妄を選ぶ」と述べたことはよく知られております。もとより、これは、「日本帝国の實在」よりも、たとえ「虚妄」性を秘めるとしても「戦後民主主義」にこそ賭けようとする丸山の思想的決意のレトリカルな表現でした。しかし、その丸山にとつても、デモクラシーの「虚妄」はどこまで行つても克服すべき「虚妄」以外のものではありませんでした。問題は、その「虚妄」性が何に対する「虚妄」性であったかです。端的に言つて、それはデモクラシーのあるべき理念に対する「虚妄」性でした。

丸山によれば、デモクラシーの理念は、「*demos*の *kratia* 人民の統治」というその語源から言つても、また、それを、ともに平等な「自由で自立的な個人」にもっともふさわしい統治形態と見なした近代的観念から言つても、支配者と被支配者との同一性に求められるものでした。しかし、丸山は、そうした理念に立つデモクラシーが本来的に「虚妄」に陥る可能性を秘めていることを明確に見抜いておりました。丸山によれば、「そもそも民主政——すなわち人民統治——*government of the people*とは、本質的に矛盾概念であ」つて、「*govern*するものとされるものの機能分化、さらに統治機構内部の階層的機能分化」のゆえに、現実には「少数の支配」に墮する危険性を常にはらんでいるからです。

しかも、丸山は、ルソー同様に、近代「ブルジョア社会」に、治者

と被治者との同一性を理念とするデモクラシーが「少数の支配」に陥って「虚妄」化する可能性の現実化を見ておりました。「ブルジョア社会」におけるデモクラシーが、制度としては代表の觀念に依拠する代議制の形態をとる限り、そこでは、少数が多数を支配するデモクラシーの「虚妄」性が常態化する事態を避けられないからです。

そこから、丸山がよく知られる姿勢が導かれることになりました。すなわち、それは、デモクラシーについて、「理念」と「運動」と「制度」という三つの要素を区別した上で、「ブルジョア社会」が「制度」として採用する代議制民主制を「少数支配」の固定化のような「虚妄」に追いやらないために、「理念と運動としての民主主義」を、すなわち、治者と被治者との同一性という理念の実現を目指して「絶えざる民主化」を求める「永久革命」としてのデモクラシーを要請する丸山の姿勢に他なりません。

丸山のこうした姿勢の背後には、二つの視点があつたと言つていいかと思えます。一つは、「ブルジョア社会」の實質をなす「資本主義」も、その止揚を主張する「社会主義」も、それらが「歴史的制度」である限りにおいて「永久革命」ではなく、唯一デモクラシーだけが「未完のプロジェクト」として「永久革命」の名に値するとの丸山の視点でした。その点で丸山は根源的という意味で極めてラディカルなデモクラットでした。第二は、「少数の支配」を實質とする保守体制を民主主義体制と同一視した上で、あるいはそれを賛美し、あるいはそれを「虚妄」として断罪する風潮が強まる中で「戦後民主主義の原点」

が見失われて行った戦後日本の現実への丸山の批判的な視点でした。丸山をして、例えば、「戦後の「理念」に賭けながら、戦後日本の「現実」にほとんど一貫して違和感を覚えて来た私の立場の奇妙さ！」と言わしめた背景には、デモクラシーの理念から遠い戦後日本の「民主的現実」に関する丸山の痛苦にみちた認識があつたと言つていいかと思えます。

しかし、同時に注意すべき点は、「民主革命」と「市民社会の止揚」との関連を視野に入れた丸山のデモクラシー論の射程が、「少数支配」だけではなく、「市民社会」においてデモクラシーが陥る「虚妄」性のもう一つの側面、すなわち、その「病理」形態にまで及んでいたことです。

#### (四) デモクラシーの病理とそれへの処方箋

これまで見てきましたように、丸山は、近代「市民社会」の民主政につきまとう「虚妄」としての「少数支配」の制度化を、「不断の、また無限の過程または運動」としてのデモクラシーによって打破しようと考えた。「ラディカルな民主主義」者でした。しかし、他方で、丸山は、「ブルジョア社会」において、「人間の内面的独立性の認識の上に立つ」べきデモクラシーが、逆に、「多数の支配」の名の下に個人の自由や自立性を奪いかねない危険性を伴っていることを冷徹に見据えるデモクラットでもありました。丸山にとりまして、かつてトックヴィルやJ・S・ミルが指摘した「多数者の専制」は、マス化した民



衆の熱狂的な集団心理の基盤の上に成立したナチズムとして、あるいは、「不寛容」が畏友のノーマンを死に追いやった狂信的な反共主義に立つマッカーシーイズムのような「民主主義の名におけるファシズム」として、生々しい同時代史的体験であったからです。

そこから丸山は、「市民社会」におけるデモクラシーに伴うそうした病理を克服するための条件を問いつめて行きました。その作業は、また、デモクラシーを独自の形でリベリズムと結びつけようとする丸山の努力でもありました。そうした努力にとつて、デモクラシーの担い手たるべき「近代的人格」に丸山が与えた第二、第三の属性、すなわち、学問、芸術、道徳、経済といった文化を営む自由の主体であるという第二の属性、相関的で社会的な存在であるという第三の属性が、重要な意味をもつことになりました。

まず、第二の属性に関連して注意すべき点は、丸山が、「政治は経済、学問、芸術のような固有の「事柄」をもたない」と考えたことでした。これによって丸山が意味したのは、「政治的なるもの」は、他の文化諸領域と明確に区別される「固有の領土」をもたずに「人間営為のあらゆる領域を横断している」こと、したがって、文化的営みは、それぞれに固有の論理と価値とをもち、自由の領域に属するとはいえず、政治と完全に無縁ではありえないということでした。これを逆に言えば、政治が、あらゆる文化的領域を横断するがゆえに、学問、芸術、道徳、経済をまるごと飲みこむ「全体主義化」への絶えざる危険性をもつこと、それに対して、固有の価値をもつ文化の領域から抵抗し批判する

リベラルな視点に立つことが政治の「全体主義化」を阻止するために決定的に重要だということでした。

若干脇道にそれますが、丸山のこうした考え方に関連して興味深いのは、政治と他の文化諸領域との関係の問題をめぐって丸山が常に意識していた南原の立場との間に分岐と交錯とが見られることです。まず、分岐についてですが、南原が、真、善、美という文化価値に仕えるべき学問、道徳、芸術と並んで、正義という文化価値に仕えるべき政治固有の領域を設定した点で、文化諸領域に潜む政治性を見すえていた丸山は南原からは離れて立っておりませんでした。しかし、政治が他の文化諸領域を支配する「全体主義化」への警戒を呼び掛ける丸山の立場は、それぞれに異なった文化諸領域が他の文化領域に介入する場合、例えば、政治が学問や芸術や道徳に介入するような場合、そこには非和解的な「文化闘争」が不可避免的に生じるとした南原の立場と交錯する面をもっておりませんでした。

本論に戻りますと、このように、固有の価値をもつ文化の諸領域から政治の「全体主義化」に抵抗し批判することの重要性を指摘する丸山の視点を背後から支えていたものがありました。それは、丸山が近代的個人に与えた第三の属性、すなわち、「相関的で社会的」であるという属性に他なりません。丸山は、各個人が自らの社会性や他者との相関関係を自覚しないまま個別的な文化領域に閉じこもって反政治的あるいは非政治的な態度を貫くとき、それはしばしば「過政治的な」あるいは「全政治主義」的な態度に反転して政治の「全体主義化」に

合流すると考えていたからです。

丸山はこうした判断に立ちまして、「民主主義の名におけるファシズム」という「市民社会」におけるデモクラシーの病理を克服するための処方箋を次の点に求めました。すなわち、それは、「非政治的領域から発する政治的発言という近代市民の日常的なモラル」に基礎を置くりベラルな精神態度としての「ラディカルな（根底的な）精神的貴族主義」を、理念として治者と被治者との同一性を求める「ラディカルな民主主義」と「内面的に結合する」途に他なりません。つまり、これによって丸山は、治者と被治者との同一性を求める「永久革命」としてのデモクラシーの理念を追い求めるとともに、それが「多数者の専制」に陥って「全体主義化」した場合には、文化の領域から政治を相対化する「精神的貴族主義」を貫くことでそれに抵抗することの必要性を説いたのだと思います。

その場合、丸山は詳細には論じてはおりませんが、丸山の論理を付度して推論するしかありませんが、「精神的貴族主義」の主体は誰かという問題が出てきます。すぐに想起できるのは、丸山が「開国」という五九年の論文のなかで、「非政治的な目的」をもちながら「政治を含めた時代の重要な課題」に批判的に対峙した「明六社」に「精神的貴族主義の姿勢」を帰した事実が示唆するように、文化を軸として集まる多様な、しかしマスとしての大衆と比べれば少数派に属する「自主的集団」が「精神的貴族主義」の主体ということですが、しかし、丸山の視点は、デモクラシーにおいて少数派が果たす批判的な役割の

重要性という地点にとどまってはいなかったように思われます。丸山が、「自由で自立的な個人」に文化を営む自由を帰した点が暗示するように、丸山は、マス化した大衆一人一人が、「精神革命」を通してそうした自由な主体に転化して、文化の領域から政治を相対化し、批判する「精神的貴族主義」の担い手となっていくことを期待したと考えられるからです。そして、そうなったときに、「ラディカルな民主主義」と「ラディカルな精神的貴族主義」とが「自由で自立的な個人」のなかで「内面的に結合する」というのが丸山の最終的な判断だったと考えるのが、丸山の論理に一番近い解釈ではないかと私は思います。

このように、丸山は、戦後の日本をも例外としない「市民社会」下のデモクラシーの「虚妄」化のうち、まず、「少数の支配」の制度化に対しては「永久革命」としてのラディカルなデモクラシーを要請することによって、「多数の支配」がもたらす病理化に対しては「精神的貴族主義」というリベラルな視点を対置することによって対処するとともに、最終的には、マスとしての大衆に「自由で自立的な個人」への転化を不断に促しつつ、この個人のうち「ラディカルな民主主義」と「ラディカルな精神的貴族主義」とを一身で担うデモクラシーのあるべき担い手を見ようとしていたように思います。しかし、丸山にとって、真の問題はその先に横たわっていたと言わなければなりません。

## (五) 歴史意識の執拗低音

これまでの概観からあきらかなように、戦後日本の「民主革命」の遂行のためにデモクラシーの「虚妄」化を克服しようとした丸山のデモクラシー論は、「戦中と戦後の間」にあつて彼が展開した二つの学問領域、すなわち、「日本における近代的思维の成熟過程」を分析した第一の領域と、「日本の精神構造」の病理や欠陥を分析した第二のそれとの連鎖のうえに構想されたものでした。しかし、丸山のデモクラシー論がそこで終わったわけではありません。丸山の透徹した眼差しは、デモクラシーを根底で支える「近代的人格」、すなわち、「前国家的権利」と多様な文化を営む自由と社会性をもつ「自由で自立的な個人」の創出を根本において阻むものにも注がれていたからです。それは、丸山が、ある意味では、日本人の精神の「病理」を分析した第二の仕事の領域を思想史のより根源的なレヴェルにまで深めようとして展開した仕事の第三の領域においてでありました。

前にも述べましたように、丸山の仕事の第三の領域は、文化接触に当たって「外来思想を日本化する契機」を「歴史意識の「古層」として析出しようとして展開されたものでした。もちろん、丸山の「古層」論の妥当性については、例えば、丸山は国民性論のような本質主義的な議論に陥っているのではないかといった議論が引き起こされた事実が示唆するように、厳密な歴史的検証が必要かと思えます。しかし、私のここでの関心はそこではなく、丸山の「古層」論の動機に

あります。そして、その点に関する限り、丸山の「古層」論は、日本において「近代的人格」の創出や「近代的精神」の成立を根底で、しかも執拗に阻み続ける思考や精神のパターンを、ある学者の言葉を借りますと、「精神構造としての天皇制」を、第二の仕事の場合よりはるかに深く、『古事記』や『日本書紀』のような日本思想史の淵源にまで遡って追い詰めようとする動機に出るものだったと言つてよいかと思えます。

しかし、そうした動機に出るこの研究領域で丸山が見いだしたのは極めて苦しい現実でした。丸山は、そこで、次のような結論に達するほかはなかつたからです。つまり、「今の永遠化」と「現在の絶対化」とが結びつく日本の歴史意識の「古層」が、そして、「政事」としての政治を「上級者」を下から同方向的に翼賛する「上級者への奉仕」とすることで「決定の無責任体制」に帰着する日本の政治意識の「執拗低音」が、自由で主体的で自己責任を負いうる「近代的人格」の確立にとつても、そうした人格が担うべき「永久革命」としてのデモクラシーの再生にとつても、重大な桎梏となつていてと考えざるをえなかつたからです。

## むすび

以上概観してきましたように、丸山の思想世界は、「近代的人格」に支えられた「永久革命」としてのデモクラシーによる現実変革への

意志に結実して行った第一、第二の領域と、その変革への意志を執拗に阻み続ける日本人の精神の「古層」を冷徹に析出した第三の領域という二つの極のなかで円環構造を、すなわち、第一、第二の研究を推し進めれば推し進めるほど、そのなかで価値化した近代的人格の確立やデモクラシーの展開を阻む条件が第三の研究領域において浮かび上がってくるという形での循環構造をなしておりました。

しかし、その場合にも、丸山がデモクラシーによるこの国の変革への意志を放棄したわけではありませんでした。それは、丸山が、七五年の「日本思想史における「古層」の問題」という論文のなかで、マルクスによるヘーゲルの転倒に関するカール・シュミットの解釈に依拠しながら、「日本の過去の思考様式の「構造」をトータルに説明」することが、「執拗低音を突破するきっかけになり」「変革の第一歩」となると述べている点にあきらかです。この認識があった限り、丸山はデモクラシーによる変革へのシニシズムを免れておりました。

しかし、日本における「近代的人格」の形成をいわば通時的に阻む精神の「古層」の存在を認識していた丸山が、「精神革命」を前提とする「近代的人格」の創出、それによる「民主革命」の達成について樂觀的であったとは到底考えられません。むしろ、その「古層」を突破する可能性をもつ「超越的普遍者の自覚」が「古層」によって絶えず掘り崩されて行くことを痛切に認識していた丸山のうちには、おそらく、この国の「人間革命」や「民主革命」への深いベシシズムが湛えられていたと思われれます。上に挙げた論文の中で、丸山が「精神革

命というのは口でいっただよさしくないと述べている事実がそれを暗示しています。

にもかかわらず一つ言えることは、理念から遠い現実の冷徹な認識を現実のトータルな変革への契機とする努力を続ける以外にそのベシシズムを克服する途はないということも、我々に対する丸山の「学問のすゝめ」であったことです。それは、ある意味で、理念を現実化するためには理念を実現すべき場である現実を認識しなければならないとして「理想主義的現実主義」を唱えた南原に通じる態度でもありました。丸山が南原と共有するそうした態度を継承し、デモクラシーによるこの国の貧しい「民主的現実」の変革に生かすことができるかどうかは、われわれポスト丸山世代に課せられた逃げることのできない歴史的課題であり、その自覚は、この国のデモクラシーが機能不全に陥っている現在ますます必要になっていると言わなければなりません。その点を結論として、私の報告を終わりにしたいと思います。長時間にわたる御清聴、有難うございました。

文部科学省 平成24年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業  
「20世紀日本における知識人と教養—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」

## 第15回 丸山眞男文庫記念講演会

# 丸山眞男の思想世界

—デモクラシー論との関連において—

かとう たかし

講師 **加藤 節氏**  
(成蹊大学名誉教授)

日程 2013年12月6日(金) 15:00～16:30  
会場 東京女子大学 24202教室

申込不要・入場無料

### 問合せ先

東京女子大学 丸山眞男記念比較思想研究センター

〒167-8585 東京都杉並区善福寺2-6-1

Tel: 03-5382-6817 Fax: 03-5382-6120

E-mail: marubun@lab.twcu.ac.jp

HP: <http://www.twcu.ac.jp/facilities/maruyama>

### 【講演の概要】

丸山眞男という人は、自分が何をしているかについて極めて自覚的な思想家でした。丸山が、自分の仕事の意図や目的が何であったかについて言及することが多い事実がそれを示しています。そうした自身による言及を手がかりにして整理すると、丸山の仕事は以下の三つの領域に大別することができると言ってよいかと思えます。すなわち、日本の「良き」思想的伝統を過去の歴史のなかから取り出し出てくる作業、日本人の精神構造や行動様式の欠陥や病理を分析する作業、外来思想との文化接触の型を規定する日本人の思惟構造の原型を探る作業がそれであります。しかも、私が見る限り、丸山の仕事のこれら三つの領域はバラバラのものではなく、全体として一つの円環構造をなしておりました。私の報告では、丸山の仕事の三つの領域が織りなすその円環構造をデモクラシー論に関連させて解明することによって、丸山の世界に関する一つの全体的な見取り図を描くことを試みてみたいと思えます。



### 【講師プロフィール】

1944年長野県生まれ。東京大学法学部卒業。同大学院法学政治学研究科博士課程修了。法学博士。成蹊大学法学部教授を経て、現在は成蹊大学名誉教授。専門は政治哲学・政治学史。ホッブス、スピノザ、ロックを中心とし、政治と宗教との関係を問題関心として十七世紀政治思想史の研究を続けるとともに、特に東西冷戦終焉後の世界を政治哲学的に考察する仕事を同時代認識の試みとして続けてきた。主な著書に、『近代政治哲学と宗教』『ジョン・ロックの思想世界』（東京大学出版会）、『政治と人間』『南原繁』『政治と知識人』（岩波書店）、『政治学を問いなおす』（筑摩書房）、『同時代史考』（未来社）、翻訳に、ジョン・ロック『全訳 統治二論』（岩波文庫）等がある。

### 丸山眞男文庫とは

日本政治思想史の研究を中心に、政治思想家として世界に向けて発信し続けた丸山眞男は、戦後の日本を代表する知識人でありましたが、その思索の跡を伝える約2万冊の蔵書と約3万頁の草稿類が1998年に東京女子大学に寄贈されました。東京女子大学は、日本における丸山眞男研究の拠点となり、貴重な資料がひろく活用されることを願って丸山眞男文庫を設立し、調査と整理を進めるとともに講演会、公開研究会、公開授業等を開催しています。

### 「20世紀日本における知識人と教養」プロジェクトとは

東京女子大学は、2012年度より、丸山眞男文庫の資料に基づいた研究プロジェクト「20世紀日本における知識人と教養—丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用—」を開始しました（文部科学省平成24年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」採択プロジェクト）。このプロジェクトは5年間にわたって二つのテーマ（「20世紀知識人の教養と学問—丸山眞男文庫を素材として—」および「丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築」）を軸として、研究を進めています。